

ギュスターヴ・フローベール研究 (4)

大 貫 徹

外国語教室

(1993年 8月25日受理)

Une Etude sur Gustave Flaubert (4)

Tohrui OHNUKI

Department of Foreign Languages

(Received August 25, 1993)

Emma Bovary, héroïne de *Madame Bovary*, refuse certainement le réel, mais elle est trop profondément attirée par lui pour vivre en pure gratuité dans le monde de son imagination. Effectivement, elle ne peut pas vivre ses amours comme de vraies amours livresques: toujours elle doute, s'inquiète, elle essaie de se rassurer sur la réalité de son rêve, et elle tâche pour cela de le vérifier dans la vie. Bref, elle fait des expériences. Ces expériences, c'est dommage, finissent mal, et elle éprouve de grandes désillusions. C'est en somme pour ne pas avoir complètement cru à sa rêverie romanesque qu'elle, toute désespérée, s'est finalement tuée.

D'autre part, Don Quichotte, héros bien favori de Flaubert, ne doute pas que les moulins à vent ne soient de vrais géants: il ne fait pas d'expérience, il n'éprouve pas de désillusion. Bien contrairement à ce que l'on imagine, Emma n'est pas une autre don Quichotte.

C'est ainsi qu'il faudrait voir en *Madame Bovary* bien moins le procès de l'illusion romanesque (donquichottesque) que celui d'un romanesque incapable de soutenir jusqu'au bout ses illusions. Dans cette étude, nous allons tenter de mettre en évidence cet aspect de ce roman, en examinant minutieusement le rêve d'Emma.

当論文は、名古屋工業大学紀要第44巻(1992年)に掲載されたギュスターヴ・フローベール研究(3)に続くものであり、筆者のフローベール論全体の第一章第三節に当たるものである。

序 章 (第40巻に掲載)

第一章 『ボヴァリー夫人』(*Madame Bovary*)論

—エンマ・ボヴァリーの夢の自己崩壊性—

第一節 エンマの夢がもつ意味 (第43巻に掲載)

第二節 エンマの悲劇

—空虚な夢と充実した夢— (第44巻に掲載)

第三節 エンマの生涯

—自己埋没への軌跡— (本号)

第一章 『ボヴァリー夫人』(*Madame Bovary*)論
—エンマ・ボヴァリーの夢の自己崩壊性—

ギュスターヴ・フローベール(Gustave Flaubert)の名を一躍世間に広めさせたこの作品(1856年発表)に関して、これまで数多くのことが言われてきた。当論文では、夢と現実との軋轢から自殺したと一般的に言われている女主人公エンマ・ボヴァリー(Emma Bovary)の姿に焦点を絞り、彼女の夢が、現実との摩擦からではなく、むしろそれ自体で必然的に崩壊する運命にあり、こうした夢の特殊性が結局は彼女を自殺に導いていったのではないかという点を明らかにしてゆきたい。

なお、この作品からの引用は、特に断らない限り、以下のテキストからである。本文中では引用箇所のパージ数のみを記すものとする。

*

*

Gustave Flaubert, *Madame Bovary*, édition établie et présentée par Claudine Gothot-Mersch, Garnier, 《Classiques Garnier》, 1971. ただし、日本語にするにあたっては、『ボヴァリー夫人』(伊吹武彦訳), [全2冊], 岩波文庫, 1960年を参照したが、必ずしもそれに全面的に従ったわけではない。

第三節 エンマの生涯

— 自己埋没への軌跡 —

A. エンマの生の軌跡 — 相反する二つの存在形態の相互作用

先号の紀要(第44巻)に掲載した第二節の末尾部分においてすでに示唆した¹⁾ように、エンマの内部に存在する相反する二つの存在形態、すなわち「受動的な夢想家エンマ」と「能動的な実際家エンマ」という二つの存在形態、この二つがエンマの内部で互いに他を牽制し合い、刺激し合って彼女の生を進ませて行くのであるが、この節ではその様子を詳しく振り返ってみたい。というのも、そうすることで、『ボヴァリー夫人』という小説が、たとえば同時代のバルザックやスタンダールに見られる典型的な近代小説 — 強烈な自我の持主の主人公と近代ブルジョワ社会との対立葛藤がテーマの小説 — などとどのように異なっているのかをいささかでも明らかにできればと思うからである。

すでに何度か触れた²⁾ように、エンマはシャルルと結婚することによって — 正確には、結婚という「刺激を受ける」ことによって、と言うべきであろう —、これまで何度も夢見ていた「あの幸福」が自分のものになるのではないかと考える。

[...] l'irritation causée par la présence de cet homme [=Charles], avait suffi à lui faire croire qu'elle [=Emma] possédait enfin cette passion merveilleuse qui jusqu'alors s'était tenue comme un grand oiseau au plumage rose planant dans la splendeur des ciels poétiques [...] (P.41)

「シャルルという男の存在による刺激、ただそれだけで、エンマは、今まで大きなバラ色の鳥のように輝かしい詩の天空にのみ翔っていたあの素晴らしい情熱を、いよいよわがものにしたいのだと思い込んだ。」

しかし、シャルルと結婚することによって、「いよいよわがものにしたいのだと思い込んだ」はずの状況も、彼女の「実際家」的な性質の現れとして、その状況をそのまま — ある種の諦め(?)と共に — 受け入れることができない。エンマの柔らかいベチコートの中にすっぽり

包まれて「空虚な夢」に耽ってしまったシャルル³⁾とは異なり、エンマは夢を自分の心の中にいつまでも維持することができない。というのも、彼女は、夢を「現実以上に堅固で充実した」ものにしようとして、それを性急に現実世界の中で《検証しよう》とするからである。

Avant qu'elle se mariât, elle avait cru avoir de l'amour; mais le bonheur qui aurait dû résulter de cet amour n'étant pas venu, il fallait qu'elle se fût trompée, songeait-elle. Et Emma cherchait à savoir ce que l'on entendait au juste dans la vie par les mots de *félicité*, de *passion* et d'*ivresse*, qui lui avaient paru si beaux dans les livres. (P.36) (c'est nous qui soulignons)

「結婚するまで、エンマは恋をしているものと信じていた。しかし、その恋から当然くるはずの幸福がないのは、自分の思い違いだったに相違ないと考えた。そしてエンマは『至福』とか『情熱』とか『陶酔』とか、物の本で読んだ時あれほど美しく思われた言葉を、世間の人は本当はどんな意味に使っているのか知ろうとした。」(傍点筆者)

傍点箇所のように、現実世界の中で《検証しよう》とすると、そこには「夢と現実」との甚だしい落差があるために、至るところに破綻が生じてしまい、結局はすべて崩壊してしまうことになる。

結婚生活への幻滅の後に、思わぬことから、エンマはヴォービュサールにあるダンデルヴィリ侯爵の舞踏会に招待され、これを契機に「パリ」への憧れが彼女の心に突然生じることになる。だがこの場合でも、「能動的な実際家エンマ」が、「受動的な夢想家エンマ」の抱いた「パリ」を次第に侵食し、破産させてしまうことは言うまでもない。エンマにおいては崩壊のプロセスはいつも同じである。

この「パリ」は、すでに述べた⁴⁾ように、抽象名詞にも近い空虚な「パリ」に過ぎないのだが、エンマはその空虚性を空虚性のままに支えることができず、現実の中に存在する具体的なパリによって、その空虚性を埋めようとする。言うなれば、《検証しよう》とすることで、「かなた」を強引に「こなた」にしようとするわけである。

彼女はパリの地図を購入し、指先でその図面をたどりながら、夢の中でパリ市街の至るところを駆け巡ったり、また新聞や雑誌を購入しては、芝居、競馬、夜会、さらには最新の流行傾向や一流洋服店の所番地、ブローニュの森やオペラ座の社交日に至るまで、実際のパリの具体的な情報を得ようとする。

しかしながら、すでに指摘した⁵⁾ように、エンマが思い描く「パリ」とはあまりにも細かい場面や情報からなるがゆえに、かえってそこには現実のパリに相応しい全体像が徹底して欠けることになるのだ。逆に言えば、エンマの夢想は、枝葉末節的と言っても決して過言ではない、「金総つきのビロードをかけた卵形テーブル」とか「ペチコートの裾に付けられたイギリス・レース」とかというような極端な細部にとりわけ執着することで次第に現実のパリから離れ、やがて細部の鮮明さに彩られた奇妙なものへと転じてゆくようになる。

こうした奇妙さについては、すでに、「エンマには、言葉に対して、一種の物神崇拜《fétichisme》的なところがあり」、しかも、そうした言葉を連ねれば連ねるほど、[エンマは]ますます幻想の世界にのめり込んでゆく⁶⁾と先号掲載の拙論で指摘している以上、ここではその奇妙さの具体的な内容についてはこれ以上言及しない。いずれにせよ、そうした奇妙な細部からなる幻想的な「パリ」の中に、いつの間にかエンマの夢想自体がすっぽり埋没してしまうことになる。そうしている内に、当然のことながら、次第に、「パリ」という夢が、そしてその中心に位置しているはずの「子爵」の思い出までもが、あまりにも多くの言葉に包まれているがために、逆にきわめて曖昧なものとなり、ついにはすっかり消え去ってしまうのである。

Elle étudia, dans Eugène Sue, des descriptions d'ameublements; elle lut Balzac et George Sand, y cherchant des assouvissements imaginaires pour ses convoitises personnelles. [...] Le souvenir du Vicomte revenait toujours dans ses lectures. Entre lui et les personnages inventés, elle établissait des rapprochements. Mais le cercle dont il était le centre peu à peu s'élargit autour de lui, et cette auréole qu'il avait, s'écartant de sa figure, s'étala plus au loin, pour illuminer d'autres rêves. (PP.59-60)

「ウージュヌ・シューの小説のなかで家具調度の描写を研究したり、バルザックやジョルジュ・サンドを読んで、そこに自分自身の欲望の空想的な満足を求めたりした。(中略) 子爵の思い出がいつも読書のなかに蘇ってきた。子爵と作中の人物たちとを、彼女は結びつけた。しかし子爵を中心とする円は次第に広がり、子爵の帯びている後光は顔を離れ、さらに遠く広がって、ほかのあまたの夢を照らした。」

この引用箇所の後半部分を草稿『ボミエ＝ルルー版』に描かれた見事な比喻で補ってみると事情がよりはつき

りとするだろう。

その時、幾多の光線に照らされたその中心点を子爵が占めているその円が、子爵の回りに拡がっていった、そしてあらゆる方向に等距離に拡がりながら、子爵の個性が霧散してしまった。それはちょうど、水の入ったコップの中に滴した一個の赤ぶどう酒の雫のようであった。⁷⁾

水面に落とした一滴の赤い雫がいつかは溶けて消えてしまうように、子爵も、パリも消えてしまい、エンマにとって、再び「退屈な田舎」に囲まれている「凡庸な現実」のみが目に入ることになる。しかしながら、一度「はるかかなた」の夢にすがりついた分だけ一層現実への嫌悪感が増すばかりである。その結果、あれだけエンマが望んでいた《au loin quelque voile blanche dans les brumes de l'horizon》(P.64)「はるか水平線の濃霧の中に[漂う]白帆の影」という唯一の希望——しかもかすかな希望——までもが消えてしまうことで、まさしく、彼女が述懐しているとおり、

L'avenir était un corridor tout noir, et qui avait au fond sa porte bien fermée. (P.65)

「未来は一筋の廊下だ、そしてその奥では戸がぴたりと閉まっている」

という閉塞的な精神状態に陥ってしまう。こうした閉塞状況を、決定稿からは惜しくも省かれてしまった草稿『ボミエ＝ルルー版』の一節ほど見事に表現している箇所もないだろう。

地平線がこんなにも早く閉ざされてしまったのはどうしてだろう。以前には、そこに限りない奥行きを垣間見ていたのに？⁸⁾

そして以前と同じように、

[...] chaque matin, à son réveil, elle l'espérait pour la journée, et elle écoutait tous les bruits, se levait en sursaut, s'étonnait qu'il ne vînt pas; puis, au coucher du soleil, toujours plus triste, désirait être au lendemain. (P.64)

「毎朝目を覚ますと、今日じゅうにはきっと何かがやってきそうに思われた。そして、あらゆる物音に耳を澄まし、跳ね起きては、それが来ないのに驚いた。やがて、日暮れになるといよいよわびしくて、明日の日を待った。」

という姿のみが空しく繰り返されることになる。これは、拙論第一節で何度か強調した⁹⁾、ただ「空しく待つ」というエンマの基本姿勢とでも言うべき姿である。言い換えれば、「受動的な夢想家エンマ」そのものの姿である。

B. 土地の移動

したがって、この「空しく待つ」という受け身的な状態を破るのは、エンマの内部からではなく、彼女の外部から、ということになるであろう。そもそもこの点に関しては、すでに拙論第一節冒頭において、「受け身的な存在であるエンマにおいて、事件というものは、彼女が自ら探し求めて出会うものではない。それは、不意に向う側から唐突に訪れて来るものなのである」¹⁰⁾と記していることで明かなように、エンマの閉塞状況を撃ち破るものは、彼女の内部にあるものではなく、あくまでその外部に位置する偶然的な何者かなのである。

では、そうした何者かとエンマはどのようにして遭遇することになるのであろうか。これが次の問題である。もちろん、その何者かにそれなりの資格や条件が前もってあるわけではない。拙論第一節において、「エンマの内部では、子爵もレオンもロドルフもみな同じ役割しか果していない[。]エンマの視線を、たとえ一時的にせよ、現実からそらし、現実の向こうに投げかけさせるための手段以外の何物でもない」¹¹⁾と述べたように、エンマの恋の相手となるために、それに相応しい何らかの条件等が存在しているわけではない。あくまで偶発的な出会い以外の何物でもない。しかしながら、まず第一に、その外部的他者との出会いそのものがなければならない。物語の冒頭近く、シャルルが偶然的なきっかけでエンマの農場にやって来て、そこで二人が出会ったように、まず、エンマは他者と出会わなければならないのである。

そうした他者との遭遇を準備するものとして、エンマの場合、なによりもまず「土地の移動」ということが挙げられるのではなかろうか。実際、(エンマの悲劇の主舞台となる)ヨンヴィル村での最初の晩に、エンマはこうした土地の移動を、そしてそれが自分にどんな意味をもつかまで次のように明確に思い浮かべているのである。

C'était la quatrième fois qu'elle couchait dans un endroit inconnu. La première avait été le jour de son entrée au couvent, la seconde celle de son arrivée à Tostes, la troisième à la Vaubyessard, la quatrième était celle-ci; et chacune s'était trouvée faire dans sa vie comme l'inauguration d'une phase nouvelle. Elle ne croyait pas que les choses pussent se représenter les mêmes à des

places différentes, et, puisque la portion vécue avait été mauvaise, sans doute ce qui restait à consommer serait meilleur. (PP.87-88)

「彼女が知らない場所で寝るのはこれが四度目であった。最初は修道院の寮へ入った日、二度目はトストへ着いた時、三度目はヴォービュサル、四度目が今度であった。そしてそのどれもが彼女の生涯にいわば新しい局面を開いてくれたのだった。彼女には違った場所で同じことが起ろうとは信じられなかった。そして今日まで生活した部分が不幸だったからには、これから送る生活はもっと幸福であるに違いないと思った。」

かくて、エンマは、こうした土地の移動に伴う外部的存在の登場によって、新たな変化が生じ、その結果、これまで何度もつかみそこねた「あの幸福」を今度こそは自分の手につかむことができるのではないかと期待することになるのである。というのも、エンマには「違った場所で同じことが起ろうとは信じられなかった」からである。

それに第一、エンマは、シャルルとは違って¹²⁾、土地を移動すること、それによって新たな事態に遭遇すること、いわゆる移動とか変化とかをとりわけ好んだのである。

— Il est vrai, répondit Emma; mais le dérangement m'amuse toujours; j'aime à changer de place. (p.82)

「『ほんと』とエンマは答えた。『でも、私、動くのはかえって面白いんです。場所をかえるのが好きですから。』

実際、《Lorsqu'elle eut treize ans, son père amena lui-même [Emma] à la ville, pour la mettre au couvent.》(P.36)「十三になった時、父親はエンマを修道院の寮へ入れるために、自分で町へ連れて行った」という記述で示される田舎のベルトー(Bertaux)から町のルーアン(Rouen)の修道院への移動。そしてその修道院から再び田舎のベルトーへの移動。そのどちらも最初のうちは移動することによってもたらされた新しい刺激、新しい生活をエンマが十分に楽しんでいる様子が明確に述べられている。

Loin de s'ennuyer au couvent les premiers temps, elle se plut dans la société des bonnes soeurs [...] (P.36) (c'est nous qui soulignons)

「はじめの間は修道院が厭などころでなく、尼さん

たちと一緒に暮らすことが楽しかった。」(傍点筆者)

Emma, rentrée chez elle, se plut d'abord au commandement des domestiques [...] (P.41) (c'est nous qui soulignons)

「エンマは家へ帰ると、はじめのうちは面白がって召使どもに采配をふるった。」(傍点筆者)

しかしながら、どちらも次第に倦怠の色が滲み始め、たとえば、以下の例にあるように、

Emma, rentrée chez elle, se plut d'abord au commandement des domestiques, prit ensuite la campagne en dégoût et regretta son couvent. Quand Charles vint aux Bertaux pour la première fois, elle se considérait comme fort désillusionnée, n'ayant plus rien à apprendre, ne devant plus rien sentir. (P.41)

「エンマは家へ帰ると、はじめのうちは面白がって召使どもに采配をふるったが、やがて田舎が厭になり、修道院を恋しがった。シャルルが初めてベルトーを訪ねてきた頃、エンマはひとかど人生の裏を見てしまったつもりで、いまさら何も知るべきことはなく、改めて感じてみるほどのものもないと思っていた。」

という具合に、「はじめのうちは」面白がるが、「やがて」厭になり、次には《fort désillusionnée》「ひとかど人生の裏を見てしまった」思いで、自分を取り囲む堅固な現実が重たくのしかかって来るような気分のまま、ただひたすら、こうした閉塞状況を打破してくれる何者かが「はるかかなたの水平線」からやって来るのを「空しく」待ち望むようになるのである。上の引用箇所の場合は、こうした閉塞状況の際に、突然、シャルルが——正確には、シャルルという一個の存在がではなく、単なる「刺激としてのシャルル」が、と言うべきであろう——エンマの目の前に登場したというわけである。

こうした初期の移動から、次にはシャルルと共に新婚生活を送るためにベルトーからトストへの移動。そしてヴォービュサル館での舞踏会のための小移動を間に挟んで、作品の第二部では、この物語の中心的舞台となるヨンヴィル村へ移ることになるわけである。この後、エンマは、第三部に入ると、レオンとひそかに逢引きするためにルーアンへ頻繁に通うことになるだろう。いずれにせよ、ほかの土地へ移動することによって、その度ごとに、エンマは何者かがやってきて、今度こそは自分の閉塞状況をすっかり変えてくれるだろうと期待することになるわけである。まさに、「今日まで生活した部分

が不幸だったからには、これから送る生活はもっと幸福であるに違いない」とひたすら思うのである。

だが、それも再び以前と同じ崩壊のプロセスを経て失敗してしまうことは言うまでもない。言うなれば、エンマは「違った場所で同じことが起ろうとは信じられなかった」にもかかわらず、実際には「違った場所で同じことが」いつも起ってしまうからである。¹³⁾

C. 「成長しない」エンマ

しかしながら、それでも、エンマは再び新しい刺激を、そして幸福を望むはずである。というのも、彼女は自分を取り囲んでいる平板な現実を直視しないために、「はるかかなた」を絶えず夢見てやまないからである。それゆえ、エンマとは、今までの経験から何事かを学ぶことはないし、また何事かを学ぼうともしない存在であると言えるのではなからうか。実際、彼女はいつも同じ失敗を繰り返すばかりである。言うなれば、エンマとは決して「成長する」ことのない存在なのである。したがって、フローバールが、この作品の終わり近くに位置する第三部六章において、レオンについて語った、次のようなことは彼女にはまったく無縁なことなのである。

D'ailleurs, il allait devenir premier clerc : c'était le moment d'être sérieux. Aussi renonçait-il à la flûte, aux sentiments exaltés, à l'imagination; — car tout bourgeois, dans l'échauffement de sa jeunesse, ne fût-ce qu'un jour, une minute, s'est cru capable d'immenses passions, de hautes entreprises. Le plus médiocre libertin a rêvé des sultanes; chaque notaire porte en soi les débris d'un poète. (P.296)

「その上、自分は近く書記長になるはずだ。今こそ真面目になるべき時だ。そこで彼はフリュートも激しい情熱も空想も捨てた。——どんな俗人でも、青春の血に燃えた時代には、たとえ一日でも、一分間でも、無限の情熱を感じ、遠大な企てに邁進する自信をもたなかった者はない。いかに月並みな放蕩者でも一度はサルタンの後にあこがれ、どんな公証人でも詩人の名残りを胸に秘めている。」

「いかに月並みな放蕩者でも[青春時代には]サルタンの後にあこがれ、どんな公証人でも詩人の名残りを胸に秘めている」ものであるが、しかし、いつかはそうしたあこがれや詩人臭さに見切りをつけ、現実との何らかの折り合いをつけては、平板な現実世界の中で生きて行く術を学ぶようになる。それが、「彼はフリュートも激しい情熱も空想も捨てた」という一節に表現されているこ

とであり、またそれがレオンは「成長した」、あるいは「大人になった」ということなのである。しかしながら、まったく「成長する」ことのない——むしろ「成長する」ことを拒否したと言うべきだろうか——エンマは違う。彼女は幸福と失墜の、あるいは夢とその破産の反復運動を絶えず繰り返すばかりである。

そういう意味では、同じ第三部第六章に置かれた次のとき、エンマの述懐ほど、このような永遠の反復運動を適確に表現してある箇所も他にないだろう。そこでは夢の中にすでに夢の崩壊の兆しが潜んでいるのである。少し長いが厭わず引用したい。なお、この箇所は途中から自由間接話法によって書かれている。

— Je l'aime pourtant ! se disait-elle.

N'importe ! elle n'était pas heureuse, ne l'avait jamais été. D'où venait donc cette insuffisance de la vie, cette pourriture instantanée des choses où elle s'appuyait ? ... Mais, s'il y avait quelque part un être fort et beau, une nature valeureuse, pleine à la fois d'exaltation et de raffinements, un cœur de poète sous une forme d'ange, lyre aux cordes d'airain, sonnant vers le ciel des épithalames élégiaques, pourquoi, par hasard, ne le trouverait-elle pas ? Oh ! quelle impossibilité ! Rien, d'ailleurs, ne valait la peine d'une recherche; tout mentait ! (PP.289-290)

「『でもやっぱり私はレオンを愛している！』と彼女は心にいった。

でも、でも自分は幸福ではない、ついで幸福だったためしが無い。人生のこの物足りなさはいったいどこから来るのだろうか。そして自分の寄り掛かるものが立ちどころに腐れ潰えてしまうのはなぜだろう...？ しかし、この世のどこかに、強く美しい人がいるものなら、熱と風雅に満ち満ちた頼もしい気立て、天使の姿に宿る詩人の心、み空に向かって哀しい祝婚の曲を奏でる青銅絃の堅琴にも似たところがあるものなら、ふと巡り会われぬことがどうしてあろう？ いや、かなわぬことだ！ しかも求めて甲斐あるものは一つとしてない。すべては虚偽だ！」

「でも、でも自分は幸福ではない」→「しかし（中略）ふと巡り会われぬことがどうしてあろう？」→「いや、かなわぬことだ！（中略）すべては虚偽だ！」と続く、肯定と否定の繰り返し。これは一種の堂々巡りに過ぎない。上の引用箇所はエンマが最後には「すべては虚偽だ！」とある悟りに達したかに見えるが、実は再び引用箇所の冒頭部分である「でもやっぱり私

はレオンを愛している！」に戻って来ることになるのは言うまでもない。事実、上の引用箇所の少し先に、

Elle pensait à lui, à Léon. Elle eût alors tout donné pour un seul de ces rendez-vous, qui la rassasiaient. (P.295)

「彼女は、彼を、レオンを想った。そのときエンマは、一切をなげうっても、自分を満足させてくれるあの逢い引きが、ただの一度でもよいからしたかった。」

とあることで、再び上の引用箇所冒頭にある《Je l'aime pourtant !》に結果的に戻っていることがわかる。

結局、エンマの生とはこうした肯定と否定の、あるいは高揚と意気阻喪の反復過程以外のなにものでもなく、ただこの反復現象が作品の冒頭ではわりにゆっくりとしたリズムを刻んでいたのに対して、物語が進むに連れて次第次第にそのテンポを高め、最終的には狂氣的錯乱にも近いきわめて激しいリズムに変わるだけである。たとえば第三部第六章の次のような一節にあるように。

Elle se promettait continuellement, pour son prochain voyage, une félicité profonde; puis elle s'avouait ne rien sentir d'extraordinaire. Cette déception s'effaçait vite sous un espoir nouveau [...] (P.288) (c'est nous qui soulignons)

「今度行ったときこそ、深い喜びを味わおうと絶えず心に期しながら、さて何の変哲もなかったことを認めねばならなかった。しかしこの失望は、すぐまた新しい希望にかき消された。」（傍点筆者）

「失望がすぐまた新しい希望にかき消される」ように、ここでは、肯定と否定とが、あるいは否定と肯定とが瞬時のうちに目まぐるしく交錯している。かくして、エンマがたどる生の軌跡とは、必然的に、夢をずっと見続けることによって、彼女の美しい夢と平板なる現実との激しい軌跡から生じた劇的狀況が、次第にその緊張を増してゆき、それが最後の瞬間にふっと切れて破局的な死を迎えるというような、きわめて「物語的」なものではない。¹⁴⁾

それは、次の日にはぼっかり開いた奥深い穴の中に落ち込むことを十分に感じながらも、《[elle] faisait des efforts pour se tenir éveillée, afin de prolonger l'illusion de cette vie luxueuse qu'il lui faudrait tout à l'heure abandonner》(P.55)「やがて見捨てねばならぬこの豪華な生活の幻を見続けるために、眠るまい眠るまいと努め」[ながら]、ヴォービエサル館での夢の

ような夜を過ごす、哀れなエンマの姿に明確に象徴されているように、すでに十分予感している、凡庸な現実への埋没の瞬間を一刻でも一瞬でも遅らせようとするために、「はるかかなた」に夢の視線を絶えず投げかけようとする過程である。それは、言い換えれば、肯定(希望)の中に否定(失望)の兆しを見つけるや否や、すぐさまそこに新たな肯定(新たな希望)を絶えず引き出そうとする過程とも言えるであろう。

D. エンマの自己埋没的な死

そのことは、逆から言えば、エンマの生の軌跡とは、たとえばバルザックやスタンダールの小説に典型的に見られるような、主人公とそれを包む世間との対立的状況の漸進的な高まりの後に主人公が劇的な死を迎えるというような、いわば「直線的な軌跡」というものではないだろう。それは、比喩的に言うならば、ほとんど同じ場所で同じ行為を反復しているうちに、いつの間にかその場所にずぶずぶと埋没していったとでも言うべきもの、言うなれば泥沼への自己埋没にも似た「自律的な死へのゆっくりとした歩み」ということになるのではなかろうか。

われわれが使用しているテキストの編者であるクロディーヌ・ゴト＝メルシュ (Claudine Gothot-Mersch) はその充実した編者序文の中で、航海のイメージ群がエンマの生涯の段階をそれぞれたくみに象徴しているという解釈を紹介している。¹⁵⁾ これによれば、彼女の生の軌跡の冒頭段階である、シャルルとの結婚生活に幻滅を覚え始めた第一部九章——すでにわれわれが見たところだが——では次のようなイメージが現れていると言う。

Comme les matelots en détresse, elle promenait sur la solitude de sa vie des yeux désespérés, cherchant au loin quelque voile blanche dans les brumes de l'horizon. Elle ne savait pas quel serait ce hasard, le vent qui le pousserait jusqu'à elle, vers quel rivage il la mènerait [...] (P.64) (c'est nous qui soulignons)

「難破した水夫のように、彼女は生活の孤独の上に絶望の目をやり、はるか水平線の濃霧の中に白帆の影を探し求めた。この偶然は何であるか、この偶然を自分の方へ吹きつける風は何であるか、それはどこの岸へ連れて行ってくれるのか、(中略) 彼女は知らなかった。」(傍点筆者)

この後、第二部十三章で、恋人ロドルフから訣別の手紙を貰ったため自殺しようと、まさに屋根裏部屋の窓からエンマが飛び下りようとした瞬間の場面は、次のよう

に記されている。

Le rayon lumineux qui montait d'en bas directement tirait vers l'abîme le poids de son corps. Il lui semblait que le sol de la place oscillant s'élevait le long des murs, et que le plancher s'inclinait par le bout, à la manière d'un vaisseau qui tangue. Elle se tenait tout au bord, presque suspendue, entourée d'un grand espace. (P.211) (c'est nous qui soulignons)

「下からじかに昇ってくる光線が、彼女の五体の重みを奈落の底へ引きつけた。広場の地面は壁に沿ってぐらぐらと持ち上がり、床は縦揺れする船のように一方に傾くかと思われた。彼女は広々とした空間に囲まれ、その突端にほとんど宙ぶらりになって立っていた。」(傍点筆者)

そして最後に、ルウルウへの莫大な借金のためにとうとう破産してしまったエンマは、最後の手段として昔の恋人ロドルフに3,000フランの借金を願い出たものの、彼から冷たく断られ、もはや行き場を失ってしまった第三部八章の箇所では次のようになっている。

Le sol sous les pieds [d'Emma] était plus mou qu'une onde, et les sillons lui parurent d'immenses vagues brunes, qui déferlaient. [...] Alors sa situation, telle qu'un l'abîme, se représenta. Elle haletait à se rompre la poitrine. (PP.319-320) (c'est nous qui soulignons)

「[エンマの]足下の土は波よりも柔らかく、田の畝はとび色の巨濤が逆巻き寄せられるかとも見えた。(中略) その時、彼女の境遇が再び深淵のような姿を現わした。彼女は胸も張り裂けるほど喘いでいた。」(傍点筆者)

第一部、第二部、第三部からそれぞれひとつずつ引用した、これら三つの引用箇所に見れる航海のイメージを順に並べてみただけでも、彼女の生が漸進的な自己埋没への歩み——この場合ならば、正確には海水への溺死ということになるだろうが、それも、ある意味では、水の中に「埋没」するものと言えるであろう——だということがよくわかるのではなかろうか。

「難破した水夫」(それでもまだどこかの岸にたどり着くことを願っている)→「縦揺れする船の突端にほとんど宙ぶらりになっている」(沈没寸前の船中で、しかもその突端に宙づりとなっているというのだから、エンマはほとんど海中に墜落しそうになっている)→「足下の土は波よりも柔らかく、そこには巨濤が逆巻き寄せ

る」(ここではほとんど海中に埋没して、まさしく溺死寸前という感じであろう)。前述のクロディーヌ・ゴト＝メルシュは、この最後の箇所に関して、はっきりと「飲み込まれる」《s'engloutir》という語句を使い、「[このとき]彼女は波よりも柔らかい地面の中に飲み込まれていくように感じているのだ」という説明をほどこしてきている。¹⁶⁾ そもそも、ゴト＝メルシュ自身は何も触れていないが、この埋没という感覚自体、草稿の『ボミエ＝ルルー版』では——《s'engloutir》という語句こそ使っていないが——次のように明確に示されているのである。¹⁷⁾

Les sillons lui parurent d'immenses vagues noires qui déferlaient autour d'elle. La terre sous ses pieds était plus molle qu'une onde et elle s'étonnait en marchant de n'y pas entrer [...]

「田の畝は彼女には黒い巨濤が自分の周りで逆巻き寄せるかとも見えた。足下の地面は波よりも柔らかかったので、彼女は歩きながらそこにのめりこまないのに驚いた。」

しかしながら、このような自己埋没、あるいは溺死のイメージ群の最も見事な例を挙げるならば、それは作品第二部冒頭においてフローベールによってさりげなく描かれた、ヨンヴィル村の薬屋オメーの店先に飾ってある胎児標本ではなかろうか。

Les foetus du pharmacien, comme des paquets d'amadou blanc, se pourrissent de plus en plus dans leur alcool bourbeux [...] (P.75)

「薬剤師の店の胎児標本は、白いほぐちの塊のように、どろどろに濁ったアルコールの中で次第にひどく腐乱して行く。」

ヨンヴィル村の広場に面した薬屋の店先にそっと置かれた、「どろどろ」とした液体の中で「次第にひどく腐乱して行く」いくつかの胎児標本の姿ほど、このヨンヴィル村で結局は生じることになるエンマの自己埋没的な、溺死にも似た死の姿を象徴するものはないであろう。

テーマ批評を代表する批評家ジャン＝ピエール・リシャール (Jean-Pierre Richard) はその素晴らしいフローベール論の中でこれに関して次のように述べている。¹⁸⁾

エンマは、バルザックにおける犠牲者たちのように、金銭という機械仕掛けの運命に屈するのではない。無気力とだらしなさ、とりわけ嘘言によって、「流砂の

ような」あの嘘言によって自滅するのだ。「足を着いたか着かないかのうちに胸元まで飲み込んでしまう、流砂のような」あの嘘言によってである。...彼女の死とは、正真正銘、しかも病理学的に言って、こうした流砂の中への埋没なのだ。

E. まとめ——「一篇の伝記」としての『ボヴァリー夫人』

かくして、エンマの物語とは、劇的な事件が緊迫した状況のもとで次々に展開され、最後に主人公が破局的な死を迎えるというようなものと言うよりはむしろ、エンマの毒薬自殺という劇的な場面はあるものの、結局は同じ経験の絶えざる繰り返しに終始した物語と言えるであろう。われわれの言葉を使えば、エンマの物語とは、自己崩壊にも似た「自律的な死へのゆっくりとした歩み」そのものということになるはずである。したがって、それは、普通の意味での「物語」と言うよりむしろ、われわれの単調な人生そのものを描いた「一篇の伝記」に近いと言った方がより正確なのではなかろうか。

ところで、この作品の執筆時期のフローベールの手紙(1853年6月25日、ルイズ・コレ宛)から、彼がこの作品に抱いていた野心とは、実は、「劇的なことがごく少ない」物語、いわば「一篇の伝記」を書くことであったという事実を知ることができる。この重要な手紙の一節を以下に引用しよう。

ほくに自信をとりもどさせてくれるのは(中略)この書物は、大詰めへとむかう一連の出来事というよりむしろ、一篇の伝記であるという事実です。劇的なことが占める割合はごく少ないのですが、その劇的要素が小説の全体的な色調のなかにうまく浸されていれば、様々な局面のあいだに、筋書の発展という意味で、調和均衡が欠けているということは気づかれずにすむかもしれません。それにまたほくは、人生というものにいくらかそんなところがあると思うのです。¹⁹⁾

この引用文からも十分伺えるように、おそらく、フローベールにおいて何かがそれまでとは決定的に変わったのである。『ボヴァリー夫人の手紙』の編訳者である工藤庸子が、「ロマン派の小説とフローベールの小説の決定的なちがいのひとつは、いわゆる筋書(action, intrigue)の占める位置である」²⁰⁾と言うように、フローベールがまず第一に描きたかったのは、いわゆる「筋書」とか「事件」とか呼ばれるものではなく、強いて言えば主人公の心の動きそのものだったように思われる。しかも、細かな描写を通してエンマの心の微妙な動きを描くということが主眼だったのである。この点に関して、工藤庸

子はさらに次のように述べている。

フローベールの小説を担っているのは、筋書や事件ではない。ほかならぬ「細々としたこと」が特異な小説世界をつくりあげその世界の変容が、目に見えぬ内面の出来事(愛の芽生えや結婚生活への失望)を暗示する。(中略) エンマの身体は、季節の変化に呼応して、しだいにあらわになり、軟化し、熟した果物のように水分が横溢する。²¹⁾

そこからフローベール独特の言葉からなる一連の手紙がルイズ・コレ宛に書かれることになる。たとえば以下のように。

ぼくがこの本についてひどく不安に思っているのは、面白い要素が乏しいという点です。出来事が不足しています。ぼくとしては、イデーは出来事であると主張するつもりですが。(中略) いま書き上げてもっている五十ページも、全体を通してただひとつの事件もありません。²²⁾ (傍点フローベール)

もちろん、「この本」に事件がひとつもないというのはいささか極端な言い方である。しかし、それがまったくの嘘と言うわけでもないように思われる。というのも、「この本」では普通の意味での「事件」が描かれているのではなく、本来の意味では「事件」になるはずのものが、むしろ「事件の不在」を告げているかのように描かれているからである。たとえば、第二部三章において描かれたエンマとレオンとの最初の逢い引き場面を見てもそのことがはっきりとわかるはずである。そこでは劇的なことは何も起こらない。起こるのはただ《à la pointe des joncs ou sur la feuille des nénuphars, un insecte à pattes fines marchait ou se posait》(P.97)「灯心草のさやや睡蓮の葉づらに、肢体の細い虫が歩いたりじっととまったりしていた」ということだけであり、実際の響きとしてはまったく聞こえて来ない《un murmure de l'âme, profond, continu》(P.97)「深い、絶えまない魂の囁き」だけなのである。²³⁾したがって、こうした観点から、

ぼくが素晴らしいと思うもの、ぼくがつくってみたものの、それは何について書かれたものでもない書物、(中略) もしそんなことが可能なら、ほとんど主題がない、あるいはほとんど主題が見えない書物です。²⁴⁾

というフローベールの名高い手紙の一節が書かれることになるのもきわめて当然と言うことになるだろう。いず

れにせよ、そこにはフローベール以前と以後とを劃然と分けることを可能にするほど明瞭な小説観の違いが示されているのである。

註

- (1) 大貫徹『ギュスターヴ・フローベール研究(3)』(名古屋工業大学紀要第44巻, 1993年3月, 39頁)
- (2) 大貫徹『ギュスターヴ・フローベール研究(2)』(名古屋工業大学紀要第43巻, 1992年3月, 84頁および91頁)
- (3) 大貫前掲論文(『フローベール研究(3)』), 38頁。
- (4) 大貫前掲論文(『フローベール研究(2)』), 86頁。
- (5) 同論文, 86頁。
- (6) 大貫前掲論文(『フローベール研究(3)』), 32頁および36頁。
- (7) Gustave Flaubert, *Madame Bovary*, Nouvelle version précédée des scénarios inédits, Textes établis sur les manuscrits de Rouen par J. Pommier et G. Leleu, José Corti, 1949, p.224.
- (8) Ibid., P.193.
- (9) 大貫前掲論文(『フローベール研究(2)』), 84頁。
- (10) 同論文, 85頁。
- (11) 同論文, 90頁。
- (12) 同論文, 90頁。
- (13) ここでわれわれは、フローベールの手紙のある一節を思い浮べることになる。それは、1853年9月2日の夜にルイズ・コレ宛に書かれた手紙の一節である。

場所の移動は何にもまして、ぼくらの人生の限られた性格をありありと見せてくれる。人生は、揺り動かすほどに、うつろな音を立てるものなのです。あちこち動いてみたところで、結局は休まなければならないし、我々の活動は、いかに多様な外観をもっていようと、絶えざる反復にすぎない。(傍点フローベール) (Gustave Flaubert, *Correspondance*, édition présentée, établie et annotée par J. Bruneau, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1980, t.II, PP.423-424.) なお、フローベールの手紙の訳はすべて工藤庸子訳を使用した。(これに関しては註20を参照されたい)

「あちこち動いてみたところで、結局は(中略)絶えざる反復にすぎない」というフローベールの生活信条そのものが、まさに、エンマの生全体の構造をその根底で貫いているかのようなのである。

- (14) アルベール・チボーデ(Albert Thibaudet)は、その見事なフローベール論の中で、エンマの死に関して、

「情念の女とはいえ、彼女が自殺するのは恋の物語のためではなくて、そこにからんだ金銭問題のためである」(Albert Thibaudet, *Gustave Flaubert*, Gallimard, 1935, P.124)と述べている。こうした指摘は、やや不十分とは言え、それでも、エンマの死の本質を適確にとらえていると言えるように思う。というのも、チボーデは、「彼女が自殺するのは恋の物語のためではな[い]」と指摘することで、この物語がそれまでのいわゆるロマン派的な物語とは異なる様相を示していることに気づいているからである。しかしながら、後に引用するジャン・ピエール・リシャール(註18を参照されたい)も述べていることだが、この物語での金銭問題は単なる契機でしかない。彼女の自殺行為は、実はエンマ自身の生の内的論理の必然的な結果のひとつに過ぎないのである。

(15) Claudine Gothot-Mersch, *Introduction*, P.49.

(16) Ibid., P.50.

(17) Op. cit., P.597.

(18) Jean-Pierre Richard, *Stendhal et Flaubert — Littérature et Sensation*, Seuil, 1954, coll. 《Points》, P.168.

(19) Op. cit., P.361.

(20) 工藤庸子編訳, 『ボヴァリー夫人の手紙』, 筑摩書房, 1986年, 20頁。

(21) 同書, 140頁。

(22) Op. cit., P.238.

(23) この点に関して、19世紀フランス小説を数多く翻訳した仏文学者、生島遼一は次のように述べている。

小説とは、伝統的に、人間情念の葛藤、ドラマ(drame passionnel)を内容としてきた。フローベールは、そういう目立ちやすいドラマを排除して、人生の目立たぬがかえってきびしいドラマを日常些事の不条理な流れのうちに見きわめようとする。彼のよく描く、小川の流れにうかぶ睡蓮のそよぎや、葉にとまった細長い肢体の虫や、台所の埃をとおしてうごく昼下りの陽光——そういう《物》のうちに見る。そういう物によって語らせる。これは小説史的に劃期的なことであった。(中略)だから、或る《物語》を最小限度に利用しつつ、それを徹底して視覚描写で迫っていく。(生島遼一『フローベール、《主題の無い本》』[『岩波講座 文学 第10巻 — 表現の方法(7) 研究と批評(下)』所収論文] 岩波書店, 1976年, 161頁)

なお、フローベールの描写、ことに『ボヴァリー夫人』における描写に関しては、ジュヌヴィエーヴ・ボレームの次の書物が大変に詳しい。Geneviève Bollème, *La Leçon de Flaubert*, Union Générale d'Édition, 1964, coll. 《10/18》, PP.207-210.

(24) Op. cit., P.31.